

# 日本語会話における留学生の会話への印象

——対話者の違いによる影響に注目して——

新井優子（筑波大学大学院生）

## 要 旨

本稿は、留学生が日本人と日本語で話す場面と、留学生同士で日本語を話す場面に着目し、それぞれの会話における言語行動と会話に対する印象について調査・分析した。その結果、留学生は、対話者が非母語話者の場面と母語話者の場面とでは、言語行動を変化させていることが明らかになった。一方会話への印象は、対話者が非母語話者か母語話者かという違いのみでは大きな差は見られなかったが、対話者に応じて調整した自分の言語行動によって、異なる印象を持つことがわかった。このことから、会話に対する印象形成には、対話者が母語話者かどうかという点のみではなく、対話者とどのような会話をするかが関係していることが示唆された。

キーワード：留学生、印象、日本語会話、共生言語、重回帰分析

## 1. はじめに

近年、大学院及び学部の留学生数が増加しており、留学生は大学等高等教育機関において欠かせない存在になっている。留学生の日本語学習の目標は、本来、日本人との円滑な日本語コミュニケーションである。しかし留学生の多くは、学習者のみが集められた教室で日本語を学び、教室場面では学習者同士のやりとりが圧倒的に多いのが現状である。

留学生のコミュニケーションは、これまで接触場面の研究として行われてきた。ファン（1992）は接触言語を基準に接触場面を分類し、会話の参加者一方が母語を用い、一方は非母語を用いる場面を「相手言語接触場面」とし、参加者いずれもが母語ではない第三者の言語を用いる場面を「第三者言語接触場面」とした。留学生の日本語会話はこの2つの場面に相当するといえる。つまり留学生が志向する日本人とのやりとりが「相手言語接触場面」であり、留学生同士の教室でのやりとりが「第三者言語接触場面」である。またファン（1999）は、日本語非母語話者（以下NNS）の言語問題をこれら2場面、つまりNNSと母語話者（以下NS）との場面と、NNS同士の場面とで比較した。その結果、NNSは会話参加に関して2つの場面で異なる印象を持っていることを明らかにした。インフォーマントであったNNSへのインタビューからは、次のような意見を得ている。

「日本人は自分の間違いが全部分かってしまうので気を付けて話さなければならないが、外国人と話すときにこの心配はなく、リラックスして話せる」

「お互いに外国人だから何でも話せる」

「すぐ話せなくても、待ってくれるからプレッシャーがない」 （ファン 1999: 40）

これと類似した知見は第2言語習得の分野でも得られている。Varonis & Gass (1985) は、英語NNS同士の会話を分析し、NNS同士の交流活動はNNSとNSの交流活動に比べ、意味交渉に関わるやり取りが多く含まれることを明らかにし、NNS達はNNS同士の方が気楽で意

味がわからないということを示しやすく、意味交渉を多く行うと報告している。

なぜ NNS は、NS との会話より NNS 同士の方が自由に話せ、話しやすいと感じるのだろうか。その要因は何であろうか。これまでの研究で得られた知見は、NNS の個人的な意見の報告やその分析にとどまり、実証的に明らかにされているわけではない。そこで本稿は在日留学生を対象に、NNS-NNS と NNS-NS という 2 つの日本語会話場面に持つ印象を数量的に調査し、その要因について考察することを目的とする。

## 2. 分析の枠組み

岡崎 (2002) は、「日本語 NS と NNS あるいは NNS 同士のコミュニケーションの手段となる日本語」を「共生言語としての日本語」としている。これは、NS と NNS の間で実践されるコミュニケーションを通じ、双方によって創造され、学ばれ、獲得されていくものである (岡崎 2001: 119)。よって留学生の日本語は、対話者となる留学生または日本人学生との間で作られる共生言語としての日本語であるといえる。

「共生言語としての日本語」に関する研究として、岡崎・一二三 (1994、1995)、一二三 (1999、2002) がある。一連の研究は、NS の調整行動を研究対象としている。一二三 (2002) は、NS 同士と NS-NNS の場面を対象に、言語面 (発話内容) と意識面 (意識的配慮) の 2 側面から調査し、その関連を分析した。そして NS が、対話者が NS か NNS かに応じて、それぞれの行動を調整していることを明らかにした。一方ファン (1999) は、言語管理理論 (ネウストプニー 1995) に基づき、NNS のインターアクション・プロセスを分析した。その結果、NNS と NS との会話では言語ゲスト・ホスト関係が成立するのに対し、NNS 同士では確立されず、新しい日本語の規範を作ることを明らかにした。これらの研究から、NS も NNS も、対話者が NS か NNS かによって会話に関わる行動を変化させていることがわかった。またファン (1999) は、言語行動についての意識調査をするため、会話後インフォーマントにフォローアップ・インタビューをし、それを元に会話に対する印象を報告している。よって会話についての印象は直前の会話から影響を受けると考えられる。

以上を踏まえ、本稿では留学生が用いる日本語を「共生言語としての日本語」と捉え、NS との場面 (相手言語接触場面) と NNS 同士の場面 (第三者言語接触場面) について、会話中の言語行動に会話後の印象の要因があると想定し、両者の関係を明らかにする。

## 3. 研究方法

### 3.1. 調査方法

会話における言語行動と会話後の印象を調査するため、まず NNS-NS の場面と NNS 同士の場面の日本語会話資料を収集した。インフォーマントは、NNS 同士でも会話を続けることができるレベルとして、日本語中級レベルの能力を持つ在日留学生とした<sup>(1)</sup>。留学生 1 人につき、対話者が留学生の場面と日本人学生の場面、2 つの日本語会話データを収集した。留学生同士のペアを 15 組、留学生と日本人学生のペアを 30 組、計 45 組を作り、日常的な雑談として最近の出来事などについて 5 分～8 分自由に話してもらった。対話者同士の親疎や性別・年齢などによる操作は行わなかったが、3 組 (留学生同士 2 組、留学生と日本人学生 1 組) を除いては全て初対面同士であった。

インフォーマントの詳細は、関東圏内の大学に在籍する留学生 30 名（男 11：女 19）と、日本人学生 30 名（男 16：女 14）である。留学生の出身国は中国 11 名、韓国 6 名、アメリカ 3 名、マレーシア、ロシア各 2 名、インドネシア、オーストラリア、カンボジア、トルコ、ベラルーシ、台湾各 1 名であった。また母語は、中国・台湾出身者 12 名の内、中国語 10 名、モンゴル語 2 名、そして韓国語 6 名、英語 4 名、ロシア語 3 名、マレー語 2 名、インドネシア語、クメール語、トルコ語が各 1 名ずつであった。滞日期間は 2 ヶ月～4 年、年齢は 10 代 1 名、20 代 25 名、30 代 3 名、未回答 1 名であった。一方の日本人学生は、20 代 28 名、30 代 2 名であった。日本人学生に日本語教育関係者は含まれていなかった。

次に会話に関する印象を調査するため、会話終了後に質問紙調査<sup>(2)</sup>を行った。質問紙はファン(1999)のインタビュー調査結果を参考に 8 項目を設定し、各質問項目は対話者が NNS の場面と NS の場面について、「5=とてもよくあてはまる」から「1=全くあてはまらない」までの 5 段階<sup>(3)</sup>で評定してもらった(図 1 参照)。調査は 2004 年 5 月～7 月に行った。

図 1 会話の印象に関する質問項目（日本語訳）

【会話について】	
①日本人と日本語で会話したときと、②留学生と日本語で会話したとき、それぞれの会話についてどのように感じになりましたか。5～1でお答えください。	
とてもそう思った (そのようにした)	5 4 3 2 1 全然そのように思わなかった (全然そのようにしなかった)
	②留学生と日本語で会話 ①日本人と日本語で会話
①話しやすかった	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
②自由に話せた	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
③リラックスして話せた	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
④たくさん間違った表現をした	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
⑤自分の日本語の勉強になった	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
⑥言いたいことがたくさん言えた	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
⑦言いたいけれど日本語で言えない ことがあった	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1
⑧母語を使った	5 4 3 2 1 5 4 3 2 1

### 3.2. 分析方法

#### 3.2.1. 言語面の分析

一二三(2002)は NS が共生言語を用いる際の、言語面と心理面の関連を、統計的手法を用いた数量的分析から明らかにしている。本稿は、会話における言語行動と会話後の印象と両者の関係を分析するため、一二三(2002)の分析方法を参考にした。

まず言語行動の分析にあたり、浦・桑原・西田(1986)は NS 同士の会話の分析から、会話を会話の参加者による「情報の共有」と「情報の合成・加工」ととらえた発話の分類カテゴリーを提案した。一二三(2002)は、NS と NNS の場面における発話内容面の処理を分析するため、浦達の発話カテゴリーに調整を加えたものを提案した(表 1)。この発話カテゴリーは、上位カテゴリーに「情報の共有(Sharing Information: IS)」、「情報の合成・加工(Processing Information: IP)」、「相槌(実質的内容のない会話)(Not Sharing nor

Processing : NSP)」、「無反応 (沈黙) (Non Reaction : NR)」が設定されている。情報の共有 (IS) とは、発話者がお互いの情報を提供しあい、それらを共有するための発話であり、情報の合成・加工 (IP) は、共有された情報を元にやりとりを行う発話である。また相槌 (NSP) は実質的内容を持たない、短い発話や相槌、笑いのことであり、無反応 (NR) は沈黙を含む無反応のことである。

表 1 発話カテゴリー (一二三 2002)

情報の共有 (IS : Sharing Information)
情報要求 (Q : Question)
情報提供 (INF : INformation)
意味交渉 (NM : Negotiation of Meaning)
情報の合成・加工 (IP : Processing Information)
意見 (OP : OPinion)
評価 (EV : EValuation)
相槌 (実質的内容なし) (NSP : Not Sharing nor Processing)
無反応 (沈黙) (NR : Non Reaction)

そして、情報の共有 (IS) の下位カテゴリーには「情報要求 (Question : Q)」、「情報提供 (INformation : INF)」、「意味交渉 (Negotiation of Meaning : NM)」が設定されている。情報要求 (Q) とは主に質問や疑問などであり、情報提供 (INF) は主に発話の切り出しや質問への答えなどである。意味交渉 (NM) は何らかの原因で会話が中断したときに、相手に聞き返したり、自分の理解をチェックしたりする相互交渉のことである。一方、情報の合成・加工 (IS) の下位カテゴリーには「意見 (Opinion : OP)」と「評価 (Evaluation : EV)」が設けられている。意見 (OP) とは、共有された情報に関して自己の情報を論理的に関連付ける発話である。評価 (EV) とは、共有された情報に対して自己の情報を情緒的に関連付ける反応的な発話である。本稿は NS 同士、NS と NNS の会話の分析に関してその妥当性が検証されたこのカテゴリーを分析に用いることにした。

分析データは、BTSJ (宇佐美 2003) を参考に録音会話を文字化した会話データである。宇佐美 (2003) は、発話の途中に相手のあいづちなどが入って話者が交替した場合、そこで一旦改行して記し「発話単位」とした。そして同一話者によって発せられ、構造的に文を成し、句点「。」で終わるまでの一連の発話を「発話文」と定義している。本稿ではカテゴリーの分類を発話文ではなく発話単位で行った。これは、発話文には複数の発話機能が含まれる場合が多く、一発話文内であっても発話ごとに機能が異なることが少なくないためである。カテゴリー分類は分析協力者 2 名で行った。分類の一致度を示すコーエンのカップ係数 (Cohen's  $\kappa$  <sup>(4)</sup>) 算出したところ、0.712 となったので信頼の置けるデータだと判定した。分類例を表 2 に示す。

表 2 発話カテゴリーの分類例

発話者	発話内容	発話カテゴリー
NC12	北海道は、一番有名な所は、あの一、札幌ですか？。	Q
J30	札幌です。	INF
NC12	あ、え、とてもきれいな所…。	EV
NC12	おきー??。	NM
J30	沖縄?。	NM
NV01	私は国費学生じゃなくて、自分で、はらいます。	INF
NV01	奨学金も、まだもらえません。	INF
NC11	まだ研究生ですから、まだ奨学金をもらう可能性は、非常に少ないですね。	OP

次に分類カテゴリーを分析するため、各カテゴリーの出現頻度を集計した。出現頻度とは、各カテゴリーの発話数を算定し、会話の最短時間として設定した 5 分あたりの発話カテゴリーの出現回数に直したものである。これは、各カテゴリーの出現回数を総発話内に

おける比率として相対化して、発話量という絶対的な値が消えてしまうのを防ぐためである。

こうして集計したデータについて、対話者が NNS か NS かによってどのような違いが現れるかを検討するために、それぞれの発話カテゴリー出現頻度について、留学生同士、日本人と留学生の 2 場面で t 検定を行って比較した。なお、分析には留学生同士 15 組から 30 人分、留学生と日本人学生の 30 組から留学生 30 人分のデータを用いた。

### 3.2.2. 会話への印象の分析

次に、会話への印象の分析にあたり、質問紙調査の評定値を集計した。まず言語面の分析と同様、対話者が NNS か NS かによってどのような違いが現れるかを検討するため、それぞれの質問項目の評定値発話について、留学生同士、日本人と留学生の 2 場面で t 検定を行って比較した。

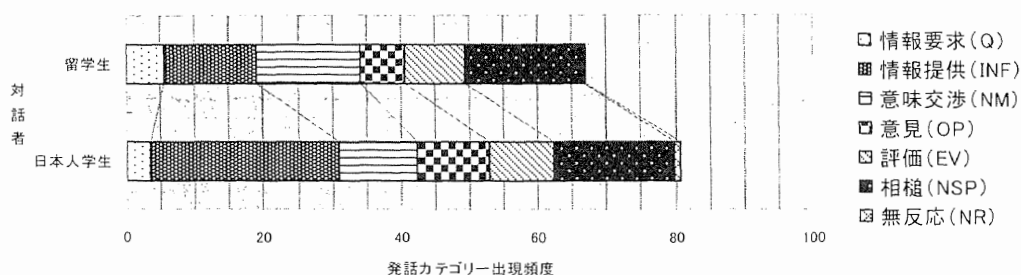
また、言語行動が会話への印象にどのように影響を与えているかを明らかにするため、両者の関連を分析した。分析は一二三 (2002) を参考に重回帰分析を用いた。重回帰分析は、基準となる 1 つの変数 (= 従属変数) に関連があると予測される複数の変数 (= 説明変数) から、どのような影響があるかを説明する際に用いる統計的手法であり、その影響の向きと大きさも明らかにすることができる。よって留学生が行う言語面の処理と会話への印象、両者間の影響の観察が可能になると判断した。分析データには、言語面の分析の際に抽出した発話カテゴリーの出現頻度と、会話への印象について留学生 30 人が、NS との会話と NNS との会話の後に評定した値、合計 60 データを用いた。そして、発話カテゴリーの出現頻度を説明変数とし、会話に対する印象についての評定値を従属変数として重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。対話者が NNS か NS かによってどのような違いが現れるかを検討するため、この分析は留学生同士、留学生と日本人の場面別にそれぞれ行い、分析結果を比較して対話者の違いによる特徴も観察した。

## 4. 分析と考察

### 4.1. 留学生の言語面

集計した留学生の発話カテゴリーについて、まず全体像を把握するため、発話カテゴリー全体の出現傾向を図 2 に示す。

図 2 発話カテゴリー出現傾向



集計の結果、留学生の発話には、情報提供 (INF) と相槌 (NSP) と意味交渉 (NM) の出

現頻度が高い様子が見られた。また発話カテゴリー出現頻度総数について、留学生同士と留学生と日本人の場面別に t 検定を行った結果、対話者が異なる 2 つの場面で有意差が見られた ( $t(29) = -3.42, p < .05$ )。つまり、対話者が NS か NNS かによって留学生は発話量を変化させており、日本人と話すときの方が多く発話していることが明らかになった。

そこで対話者が NS か NNS かの違いが、それぞれの発話カテゴリー出現頻度にも影響を与えているか詳しく見ていくため、情報の共有 (IS) と情報の合成・加工 (IP) の 2 つの過程に注目し、それぞれを構成する各発話カテゴリーの出現頻度について t 検定を行った。結果を表 3、4 に示す。

#### 4.1.1. 情報の共有の過程

各発話カテゴリーの平均値を見ると、留学生は主に情報提供と意味交渉を用いて情報を共有し、会話を進めていることがわかる。また、留学生同士と留学生

表 3 留学生の情報の共有：  
対話者が NS/NNS 場面別の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

発話カテゴリー	対話者		t 値
	NNS	NS	
	平均 (標準偏差)	平均 (標準偏差)	
情報要求 (Q)	5.44 (2.77)	3.53 (2.51)	3.05**
情報提供 (INF)	13.60 (5.96)	27.42 (8.09)	-8.83**
意味交渉 (NM)	15.14 (5.25)	11.35 (5.03)	3.10**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

と日本人 2 場面による t 検定を行った結果、全てのカテゴリーについて有意差が見られた (情報要求： $t(29) = 3.05, p < .01$ )、情報提供： $t(29) = -8.83, p < .01$ )、意味交渉： $t(29) = 3.10, p < .01$ )。留学生同士の場面では、情報要求と意味交渉が多く、日本人との場面では情報提供が多く発話されていた。佐々木 (1998) は、NS は言語ホストとして NNS に対し高い頻度で情報要求を行い、NNS の会話への参加を促す傾向があるとしている。よって留学生は日本人と間に言語ゲスト・ホスト関係を作り、日本人の質問に答える形が多くなった結果、情報提供を多く行ったと考えられる。また春口 (2004) は NNS 同士では双方がホスト・ゲストストラテジー両方を使用するとしており、留学生同士ではお互いに言語ホストの役割も担いながら情報要求や意味交渉をして、対称的な会話参加 (岩田 2006) によるやりとりをしていると推察される。

#### 4.1.2. 情報の合成・加工の過程

次に、情報の合成・加工を構成する意見 (OP) と評価 (EV) について、留学生同士と留学生と日本人 2 場面による t 検定を行った結果、意見 ( $t(29) = -3.63, p < .05$ )

表 4 留学生の情報の合成・加工：  
対話者が NS/NNS 場面別の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

発話カテゴリー	対話者		t 値
	NNS	NS	
	平均 (標準偏差)	平均 (標準偏差)	
意見 (OP)	6.55 (4.36)	10.71 (6.69)	-3.63*
評価 (EV)	8.56 (6.48)	9.40 (7.04)	-.54

\* $p < .05$

にのみ有意差が見られた。

つまり日本人との会話では、留学生は自分の意見を多く述べ、情報の合成・加工を進めることがわかった。吉田 (2008) は NS 同士と NS-NNS の初対面自由会話を比較し、NS は会話後半部になってから意見や感想を求める情報要求を行うが、NNS は NS より意見や感想を求める情報要求の頻度が少ないと報告している。このことから、意見を求められる機会が少ない留学生同士の場面よりも日本人との場面の方が要求に応じて意見を述べる機会が多

く、意見の発話が多くなると考えられる。

#### 4.2. 留学生の会話に対する印象

次に留学生が会話に対して持った印象の評定値を観察する。評定値の集計を表5に示す。対話者がNSかNNSかによる影響を検討するため、それぞれの質問項目の評定値についてt検定を行った結果、「日本語の勉強になった」については有意差 ( $t(26) = -3.002, p < .01$ ) が、「言いたいけれど日本語で言えないことがあった」については、有意傾向 ( $t(26) = -1.775, p < .10$ ) が見られた。つまり、留学生はNNSと日本語会話をするよりもNSと会話するときの方が、日本語の勉強になったと感じていることが明らかになった。そして、NSに対しては日本語で言いたいと思っても日本語では言えなかったと感じる傾向があり、日本語で表現できない困難さとストレスを感じていると推察される。

表5 会話への印象：対話者がNS/NNS場面別のt検定

質問項目	[平均値] 対話者		t 値
	NNS	NS	
1 話しやすかった	3.70 (1.06)	3.77 (.77)	-.284
2 自由に話せた	3.70 (1.18)	3.67 (.99)	.150
3 リラックスして話せた	3.70 (1.21)	3.73 (.94)	-.166
4 たくさん間違った表現をした	3.23 (.86)	3.37 (.77)	-.941
5 自分の日本語の勉強になった	3.60 (1.16)	4.13 (.97)	-3.002**
6 言いたいことがたくさん言えた	3.30 (.95)	3.53 (1.04)	-1.216
7 言いたいけれど日本語で言えないことがあった	3.30 (.95)	3.63 (1.10)	1.775†
8 母語を使った	1.53 (1.07)	1.50 (1.04)	.297

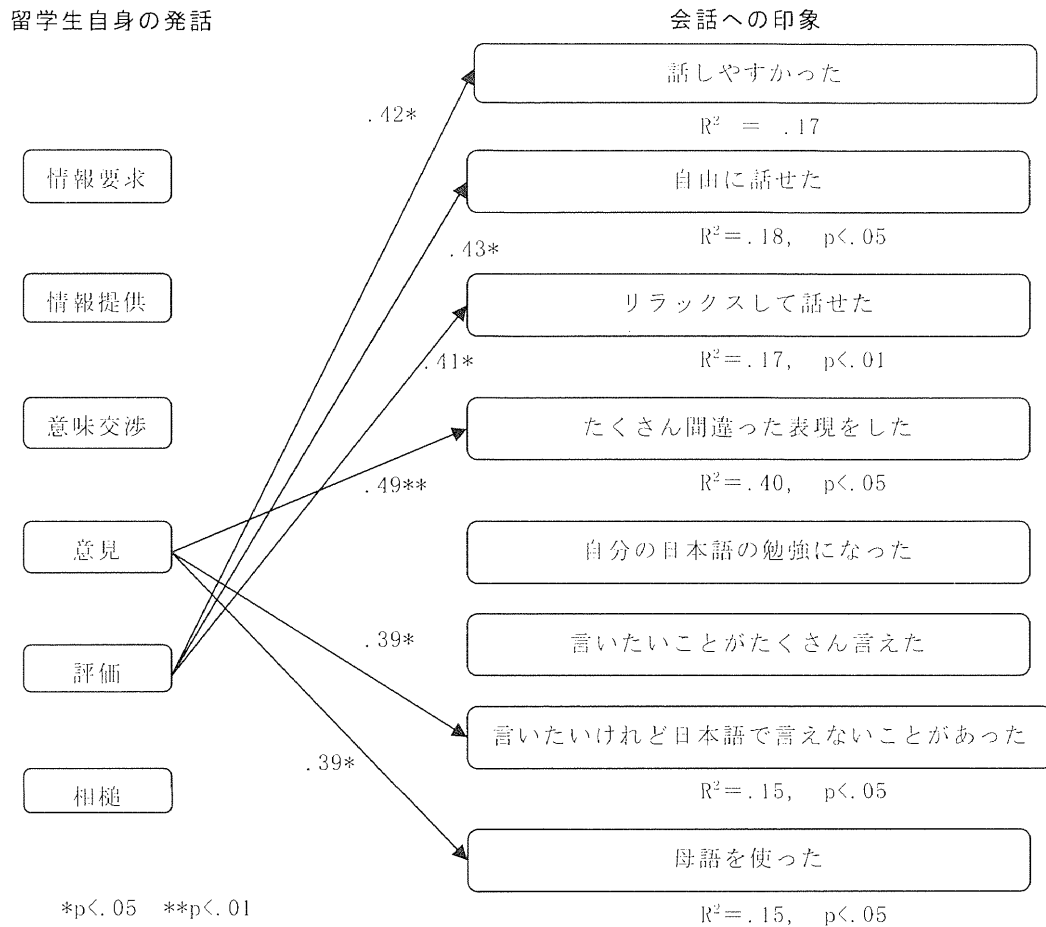
(N=27) †p<.10, \*\*p<.01 ( )内の数値は標準偏差

#### 4.3. 留学生の言語行動と会話に対する印象の関連

以上を踏まえ、留学生自らの言語行動と参加した会話への印象の関連を分析する。留学生同士、留学生と日本人それぞれの場面別に重回帰分析をした結果を図3、4に示す<sup>(5)</sup>。

まず留学生同士の場面では、自身の発話の「意見」と「評価」から会話への印象との関連が見られた。「話しやすかった」「自由に話せた」「リラックスして話せた」へは、「評価」から正の有意な偏回帰係数が見られた。つまり留学生同士の会話では、評価の発話をすることによって、その会話が話しやすくまた自由にリラックスして話せたと考えることがわかった。また、「たくさん間違った表現をした」「言いたいけれど日本語で言えないことが

図3 留学生同士の場合における留学生自身の発話と会話への印象との関連



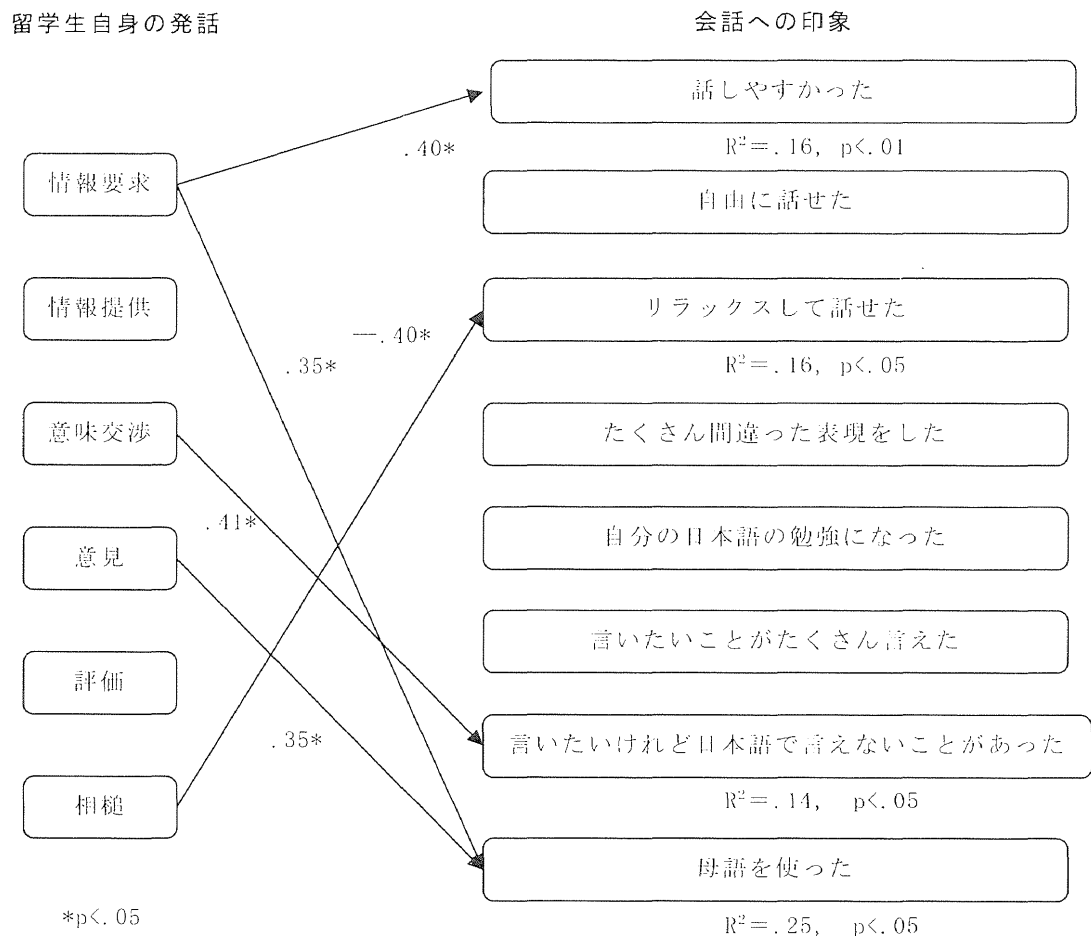
あった」「母語を使った」へは、「意見」から正の有意な偏回帰係数が見られた。つまり留学生自身は意見の発話をすることによって、その会話では自分がたくさん間違った表現をし、言いたいことが日本語で言えないことがあり、しかも母語を使用したと感ずることがわかった。

留学生と日本人の場合では、留学生同士の場合とは異なる傾向が見られた。図4より、「情報要求」からは「話しやすかった」と「母語を使った」への正の有意な偏回帰係数が見られた。また「母語を使った」へは「意見」からも正の有意な偏回帰係数が見られた。さらに「意味交渉」からは「言いたいけれど日本語で言えないことがあった」へ正の、「相槌」からは「リラックスして話せた」へ負の有意な偏回帰係数が見られた。つまり、留学生は情報要求を多く発話するとその会話を話しやすかったと捉え、また情報要求と意見を多く発話するとその会話で自分は母語を使用したと感ずる傾向がある。そして意味交渉を行うと、言いたいことを日本語で言えなかったと感ずるが、相槌を多く発話するとリラックスして話せなかった、すなわちその会話では緊張したと感ずることがわかった。

以上をまとめると、留学生は自分の発話に意見が多いと対話者がNSかNNSかに関わらず、その会話で自分は母語を使用したように感ずることがわかった。しかし会話資料と照らし



図4 留学生と日本人の場面での留学生自身の発話と会話への印象との関連



合わせてみると、母語が使用されている会話はほとんど見当たらない。ここで発話カテゴリー一定義を見直すと、意見の発話をするためには、ただ情報を共有するだけでなく対話者と共有した情報を整理して、自己の情報を論理的に関連付けるという過程を踏む必要がある。よって共有する情報を自分の頭の中で整理するという一連の行動に、発話に母語使用があったように感じる要因があるのではないだろうか。

また留学生同士の場面では、自身の意見と評価が、会話への印象に大きな影響があることが示されたが、日本人との場面では、評価と会話への印象との関係は示されなかった。このことから、情報の合成・加工の発話は、特に留学生同士の会話で、会話への印象を左右する要因となっていると考えられる。さらに留学生同士の場面では、評価と「話しやすかった」「自由に話せた」「リラックスして話せた」など会話に対する肯定的な印象との関係が示された。一方意見からは、「たくさん間違った表現をした」「言いたいけれど日本語で言えないことがあった」など否定的な認知との関係が示された。よって自己の情報を情緒的に関連付ける評価よりも論理的に関連付ける意見の方が、留学生にとっては発話に困難さを感じると考えられる。

日本人との場面では、何らかの原因で会話が中断したときに、相手に聞き返したり自分

の理解をチェックしたりする意味交渉を行うと、「言いたいけれど日本語で言えないことがあった」と感じるのは、会話中の問題に対し、自分の日本語能力不足と日本語での産出力不足を感じた結果と考えられる。また、情報要求で対話者から情報を引き出そうとすることが話しやすさと関係していた。これに関して一二三（2002）は、NS-NNS 間では NS の情報要求-NNS の情報提供によって情報の共有が一方向的に行われ、聞き手-話し手の役割分担の成立によって NNS の情報提供が多くなると述べている。またファン（1999）は情報要求が言語ホストにとって有効なストラテジーとして使用されと報告しており、留学生が情報要求を発話するということは、固定化されがちな役割分担の形を変化させ、言語ホストのストラテジーを使用することになるといえるのではないだろうか。そのため留学生は、情報要求によって日本人との関係性を変化させた結果、話しやすさを感じたと推察される。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、留学生の日本語を共生言語と捉え、日本人との日本語会話と留学生同士の日本語会話の言語面と印象に着目し、数量的に分析してきた。

留学生の言語行動は、一二三（2002）が明らかにした NS の言語面と同様に、対話者が NNS か NS かによって調整されており、それには言語ホスト-ゲストという関係性が影響していることが示唆された。一方先行研究で報告されてきた、NNS が NS との会話より NNS 同士の方が自由に話せ、話しやすいと感じる印象については、本稿の数量的分析からは明確な差があるという結果は得られなかった。しかし、NS との会話は NNS 同士の会話に比べ、日本語で言えなかったという発話の困難さを感じる傾向があることがわかり、留学生は日本人との会話に何らかのストレスを感じていると考えられる。また言語行動と会話への印象についての統計的分析からは両者の関連が明らかになった。会話の話しやすさや自由さという点については、NNS 同士の会話では、自分が持つ情報を情緒的に述べる発話と関係しており、NS との会話では、NS に対して行う情報要求が関係していることがわかった。よって、会話の話しやすさや自由さは対話者が NNS か NS かということのみでなく、対話者のやりとりによってどのような発話をしたかが要因になっていると考えられる。

第2言語習得研究の分野では、言葉は使いながら習得され、学習者個人が持つ情意要因が学習に及ぼす影響が大きいとされる。Krashen（1985）は情意フィルター仮説の中で、「習得」にとって最高の状況は不安をなくすような状況であるとしている。しかし一方でインプット仮説の中では、学習者が現在持っている知識よりも少し上のレベルの内容を学ぶことで習得は促進されると述べており、言語習得においては求めるレベルよりも自分が低い位置にあり、わからないというストレスとを感じるのは免れない。よって本稿の結果から日本語学習に対して提案を述べるとすれば、日本語でのやりとりについて、留学生は対話者が NS か NNS かだけでなく、自分の発話内容と心理状態も加味して、自分の日本語学習の機会として位置付けていくべきではないだろうか。

本稿では留学生自身の発話と会話への印象の関連を見てきたが、会話はやりとりであるため、今後、対話者に応じて調整される留学生の言語行動を、対話者の行動も含めた相互作用の観点からの分析に広げていく必要がある。また、各発話カテゴリーに該当する具体的な表現形式の考察も今後の課題としたい。

## 注

- (1) NNS 同士の言語能力差という要因を取り除くため、中級同士をペアとした。中級は幅の広い学習者層であるが、インフォーマントが所属する大学の日本語補講クラスは SPOT を用いたプレイメントテストによってクラスが決められており、調査当時設定されていた全中級レベルの 2 クラスに所属していたため、日本語のレベルに大差はないと判断した。
- (2) 英語版、中国語簡体字版、中国語繁体字版、韓国語版を用意し、最も回答しやすいものを選んでもらった。
- (3) 評定法を用いる質問紙調査の回答方法では、統計分析の使用に耐えるよう 4 段階以上が望ましいとされる。しかし選択段階が多すぎても段階間の差違が曖昧で意味がなくなり、調査協力者への負担も大きくなる。また、「5=とてもよくあてはまる」のように、段階すべてに選択用語を付与する場合、段階間の心理的距離は心理学的にも統計学的にも等間隔であることが望ましいとされるため、段階数が奇数で、調査協力者への負担も最小限となる 5 段階を設定した。
- (4) コーエンのカップパ係数は単純な一致率ではなく、調査者の主観的判断や、予測などによるズレを解消し、2 名の評価者間の偶然の一致確率を割り引いてより厳しく信頼性を問うものである。資料全体の 8 分の 1 から 6 分の 1 をサンプルとして取り出して一致度の測定を行い、カップパ係数が 0.7 以上を一致の合格基準にしているものが多い。本稿もこれに従った。
- (5) 無反応 (NR) の出現頻度は極端に低く、限られた会話にしか現れなかったため、変数には適さないと判断し除外した。

## 参考文献

- 岩田夏穂 (2006) 「日本語非母語話者同士の会話参加の様相—留学生の自由会話の場合—」『人間文化論叢』9:175-187 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 宇佐美まゆみ (2003) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 文化環境製における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究」平成 13-14 年度文部科学省科学研究費基礎研究 (C) 4-21
- 岡崎眸 (2001) 「多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育」『多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教員養成—日本語教育実習を振り返る 2000 年度』111-138 お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース教育実習報告書編集委員会
- 岡崎眸 (2002) 「内容重視の日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』49-66 凡人社
- 岡崎敏雄・一二三朋子 (1994) 「多言語・多文化共生のパースペクティブに立つ日本語教育」『中国四国教育学会教育学研究紀要』40:527-532
- (1995) 「多言語・多文化共生のパースペクティブに立つ日本語教育の枠組みと日本語教育における言語的共生化」『中国四国教育学会教育学研究紀要』41:450-455
- 佐々木由美 (1998) 「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話—同文化内および異

- 文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12:110-127
- ネウストブニー J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 春日淳一 (2004) 「言語ホストとしての上級学習者の自己調整参加調整ストラテジー — 第三者言語接触場面における会話参加の一考察」『千葉大学日本文化論叢』5:73-86
- 三三三朋子 (1999) 「非母語話者との日本語会話における母語話者の言語面と意識面の特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合—」『教育心理学研究』47-4:80-90
- (2002) 『接触場面における共生的学習の可能性—意識面と発話内容面からの考察』風間書房
- サウクエン・ファン (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2-1:37-48
- Sau Kuen Fan (2003) 「日本語の外來性 (foreignness) : 第三者言語接触場面における参加者の日本語規範及び規範の管理から」宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育—ネウストブニーのインパクト』3-21 明治書院
- 宮崎里司・ネウストブニー、J. V. 共編 (1995) 『日本語教育と日本語学習: 学習ストラテジー論に向けて』くろしお出版
- 吉田陸 (2008) 「中上級日本語学習者と母語話者の談話展開—会話進行に伴う情報要求表現に着目して—」『筑波応用言語学研究』15:139-152
- Krashen, S.D. (1985) *The Input Hypothesis: Issues and Implications*, New York: Longman
- Miyazaki Satoshi (2000) Communicative adjustment and Adjustment Marker: The Point of Request for Clarification. 『第二言語としての日本語習得研究』3:57-93
- Varonis, E. M., & Gass, S. (1985) . Non-native/non-native conversations: A model for negotiation of meaning. *Applied Linguistics*. 6:71-90

(新井優子、筑波大学大学院生、yukoala2@hotmail.com)